

自閉症児への音楽活動による発達支援 ——保育の場における実践を通して

谷村宏子 (関西学院大学 教育学部)

要約

本研究の目的は、保育の中で自閉症児にどのような音楽活動を行うことが発達支援につながるかを検討することにある。研究の方法として、快の情動を共有しながらコミュニケーション力を促進し、心理的な影響をもたらす音楽療法的実践を行い、その過程と結果について考察を行っている。最初は3名の自閉症児に音色や形体の珍しい民族楽器を用いて個別にかかわったところ、魅力的な音色と共に視覚、触覚にはたらきかける楽器操作がきっかけとなり、対象児は個別の音楽活動に参加するようになった。このような楽器遊びや身体表現においては、別府の示す情動を共有する5つの観点を中心においた働きかけを行うことにより、対象児が自主的に活動に参加する様子が見られた。音楽活動では自分の動きや楽器操作を他者に模倣されることがきっかけで他者を意識し、行動を模倣しはじめた。このような体験を通して他者との関係性を築き、クラスの音楽活動にも参加できるようになってきた。本論では、3事例をもとに音楽活動における保育者の共感的なかわり方、および楽器や選曲の観点から検討している。

キーワード：音楽活動、自閉症児、発達支援、保育、情動

1. はじめに

近年、特別支援教育制度の導入により保育の場において障害のある子どもに対する支援体制が整ってきた。しかし、クラスの音楽活動の中で保育者がどのように支援するかについては、個々の保育者に任されているという現状がある。多くの子どもは音楽活動を楽しんでいるが、自閉症児の場合、参加が困難であることが多く表現の機会を逸することになる。このような自閉症児に対する支援方法の一つに音楽療法的実践がある¹⁾。ここでは、音楽・楽器による心地よい体験から快の情動を得て、他者とのコミュニケーションを促進するなど行動に変容をもたらす働きかけを行う。この音楽療法的アプローチは、別府が指摘するところの情動に作用する働きかけと合致する。

別府(1994)は、保育者や養育者が生後4・5ヶ月から4・5歳の自閉症と疑われる乳幼児に対して、相互行動の背後にある感情や情動を共有するという観点から、自閉症児への働きかけとして次の5項目の支援内容を挙げている²⁾。①乳幼児の注視や接近行動を敏感に察知し、強引に何かをさせるような侵入的な働きかけではなく、応答的に対応すること、②乳幼児の快の情動を共有できる場を導入すること、③乳幼児の不快感を快へと変えていく働きかけを行うこと、④幼児自身が欲する事を意識できるような働きかけの中で、達成感が感じられるようにすること、⑤幼児自身が見通しを持てるような環境を用意する。保育の音楽活動においても保育者が①～⑤のような支援を念頭においた働きかけを行うことが、自主的な参加につながると考える。

2. 目的

クラスの音楽活動に参加しない自閉症児に音楽療法的にかかわることで、行動および他者との関係性にもどのような影響を与えるのか、別府による5つの働きかけの観点から3事例を検討し、音楽活動における支援の一方を明らかにする。また、音楽活動への導入における楽器の選択や選曲について分析し、子どもにとって望ましい教材についても検討する。

3. 方法

幼稚園・保育所の自由あそびの中で自閉症児を対象に、楽器遊び、身体表現、弾き歌いなど、音楽を用いた個別的な支援を継続的に行い、対象児の行動および他者との関係性の変容について質的な分析を行った。

まず、非常勤の保育者としてかかわる筆者との信頼関係を築くために、導入を丁寧に行った。内向的なA児は「カリンバ」という木製の民族楽器に興味を示し、集中して操作した。この楽器は子どもの手に収まるサイズで、キーをはじくと奇妙な音が響くと同時に振動が指先に伝わり、複数の感覚を刺激する。動くことが得意なB児は、木製の筒の内側をバチで回すとコロカラと乾いた音が鳴る「マルチトーン」の動作と音の面白さが参加につながった。音楽を聴くことを好むC児には、音積木やピアノによる弾き歌いで「おかあさん」や「お正月」など4拍子の歌を選曲し、自閉症特有のロッキングにテンポを合わせた。事例の結果と考察は以下の通りである。

4. 結果と考察

対象児3名の特性、活動内容、活動への参加のきっかけと行動の変容、および他者との関係性については、表1にまとめている。

事例Ⅰ A児（4歳男児）

A児は2歳の時に専門機関で知的な遅れとコミュニケーションに問題がある「中度自閉症」と診断され、言語療法を二週間に1度受ける。母親が歌う童謡は好まないが、人形が楽器を演奏するNHK教育テレビ番組「クインテッド」を好んで見る。

2008年5月～2009年2月まで計17回、幼稚園の自由遊びの時間に子どもを支援する非常勤の保育者として、筆者が楽器操作を中心に音楽コーナーでかかわった。最初は視線が合わなかったが、楽器カリンバを気に入り集中して演奏するうちに筆者との交互奏となり、視線が合うようになった。最初A児は楽器に関心を示すだけで他者とはかかわりを持とうとしなかったが、楽器の交互奏やピアノ連弾により次第に他者と向き合うようになった。また、他児の歌いながら歩く様子の模倣や替え歌遊びなど、他者を模倣する表現がみられた。最終的には、クラス活動において個別で経験した内容には参加し、離席回数が減少した。

A児の音楽活動における変容

1回目（2008年5月28日）カリンバに興味を示す

音楽コーナーで女兒2名がウッドブロックを叩きながら「ずいずいずっころばし」「かえるの歌」を歌うが、A児は女兒に視線を向けずに、持参したハサミで粘土を切る。カスタネットな

ど日常的に使用する楽器に関心を示さない。

筆者が楽器「カリンバ」を演奏して机の上に置くと、A児はすぐにカリンバを取り、7本のキーを指先ではじめて音を出すことに集中する。さらにA児は筆者の手の上にA児の手を乗せて、「一緒に」というサインを出し、しばらく二人で様々な音を鳴らして遊ぶ。カリンバの伴奏で「チューリップ」を歌うと、一瞬戸惑ったような表情になったが聴いている。

A児は当初、自分の遊びを持ち込み不安な気持ちと葛藤していたが、木製の民族楽器「カリンバ」の音を聴くと楽器に手を伸ばし、音色や手触り、キーの振動を楽しんだ。ここでは筆者はA児と同じ方向を向いて座り、共に音楽遊びをする人としてさりげなく楽器を鳴らしながらA児の行動を察知していた。これは、別府が示す①に該当するといえる〔以降は（別府①）と記載〕。カリンバは7本のキーの長さが異なるため見分けやすく、操作方法も弾くと簡単で、振動刺激もある。筆者が2008年に幼稚園で調査した幼児の好む楽器でも一番人気であった。カリンバの音に歌をつけるとA児は一瞬戸惑ったが、筆者の歌を聴いたことから、好きな楽器と一緒に歌を受け入れることが分かった。

5回目（7月1日）歌に楽器で同期する

A児は音積み木を自由に叩いていたが、クラスメートの「今日も雨降り」の歌が聴けると音積み木3本とバチを抱えて皆の方へ移動し、伴奏する。歌「たなばた」は静かに演奏し、活動に参加できたことを褒めると、笑った表情に

表1：対象児ABCの状況と音楽活動による変容

対象児	A	B	C
年齢・男女	4歳男児（幼稚園年中）	5歳男児（保育所年長）	4歳女児（幼稚園年中）
症状	中度自閉症	自閉傾向、多動	自閉症
特性	<ul style="list-style-type: none"> 視線が合わない 言葉コミュニケーションが困難 歌を好まない 他児と交わらない 	<ul style="list-style-type: none"> 動きが早く、一カ所に落ち着くことがない 自閉傾向 コミュニケーションが取りにくい 	<ul style="list-style-type: none"> 言語コミュニケーションが困難 こだわりが強い 多動傾向 欲求に関する名詞を言葉で言う 人に対する警戒心が強い
音楽活動期間 場所 形態	2008年5月～2009年2月（月3回） 幼稚園のクラス 個別から集団	2006年5月～7月（週1回） 保育所内のホール 小集団	2007年9月～2008年4月（週1回） 幼稚園内の教室 個別から集団
音楽活動に入るきっかけと変容 ①参加のきっかけ ②変化した音楽行動	①楽器「カリンバ」による交互奏 ②他児のリズム表現の模倣 <ul style="list-style-type: none"> 楽器音によるやり取り 他児の歌を替え歌にして歌う クラス活動に参加 	①曲に合わせたセラピストの補助付きジャンプ ②楽器による即興的リズム作り <ul style="list-style-type: none"> 音楽と身体の動きを合わせる 歌の擬音の部分を皆と一緒に歌う 	①ピアノ伴奏付きの童謡を聴く ②楽器の音探索遊び <ul style="list-style-type: none"> エナジーチャイムの交互奏 ピアノで連弾 こだわりの歌「お正月」で解消 クラス活動に参加
他者との関係性の変化（時系列） ①初回 ②中間 ③終了	①視線を合わさない。言語のやり取りが困難 ②他児の行動に関心を示し、リズムに合わせて模倣する <ul style="list-style-type: none"> 替え歌作りで他児と笑い合う ③クラスの音楽活動に参加し、個別で経験した内容は自信をもって表現する <ul style="list-style-type: none"> 創作劇でスキップを披露する 	①させられることに「嫌」と言う <ul style="list-style-type: none"> 歌を聴くことを拒否 ②後ろから身体を支えたジャンプを楽しむ <ul style="list-style-type: none"> 楽器のやり取りで、落ち着いた表情になる ③小集団の身体表現や歌の一部参加 <ul style="list-style-type: none"> 伴奏をして欲しいと要求する 	①楽器に興味を示す <ul style="list-style-type: none"> 好きな歌を何度も繰り返し聴く ②好きな童謡のリクエストを他者にジェスチャーで行う <ul style="list-style-type: none"> 終止を合わせる ③多動が減少したと認められる <ul style="list-style-type: none"> 「弾いて」と言葉で要求する

なる。A 児のカリンバの音が途絶えると筆者の歌も中断する。A 児は「あれ？」という表情で筆者の顔を見るが、また再開する。

A 児のピアノ音に音型が同じオスティナート伴奏をつけると、足を筆者にからませて曲の終止を合わせる。リクエストはクレーン・ハンドであらわす。

個別で行っていた歌に合わせる楽器体験を、A 児が集団活動に反映させた場面である。A 児の集団活動への参加意欲が芽生えると共に、楽曲の雰囲気に合わせて楽器操作をコントロールするという力を発揮することができた。ここで他者に認められる経験は音楽表現への自信につながったといえる。また、A 児のカリンバの音が中断すると筆者の歌が止まるという体験では、他者と視線を合わすという情動共有の芽生えがみられた。ピアノの連弾が楽しいと感じた A 児は何度もリクエストして曲の終止を合わせるなど、他者との協力的な行動が見られ、快の情動が共有できた場面といえる（別府②）。

事例Ⅱ B 児 (5 歳男児)

公立保育所に通う B 児は乳児期から激しく動き回り、保護者は育てにくいと感じられていた。保育所の遊びでも一カ所に留まることがなく多動である。自閉傾向も強く言語のやり取りが難しい。クラスでは手洗いで順番を待てないなどルールが守れないためトラブルが多い。クラスの音楽活動には参加しない。

2006 年 5 月 10 日より 7 月 4 日まで計 7 回、午前 9 時 30 分より約 30 分間、保育所のホールで音楽活動を行った。音楽活動に参加する幼児は、D 児 (知的に障害のある 6 歳女児)、E 児 (知的障害と自閉傾向の 4 歳女児)、F 児 (多動で自閉傾向の 5 歳男児) と B 児の 4 名で、補助の保育者が 1 名入る。

B 児は最初、小集団での活動参加を「嫌」と言っていたが、楽器「マルチトーンターン」に惹かれて入室する。歌う活動ではピアノの蓋を閉めて参加しないが、動物の鳴き声に合わせた楽器遊びやジャンプには参加する。B 児の楽器音に静かにピアノ音をつけるとピアノに対する拒否の態度は消えた。3 回目には走ることやジャンプなどの身体表現を好んで行う。5 回目に B 児自ら「楽器？」と尋ね、様々な楽器で遊ぶ。B 児の楽器音の合間に筆者が演奏することが「待つ」ことにつながり、他者を意識し始める。6 回目の歌「おもちゃのチャチャチャ」では擬音の部分を他児と口ずさむ。7 回目にスカーフを持って走ることを他児に模倣され楽しそうである。その後、他児の動きを真似始める。4 名の小集団では、好きな活動に参加し、他者とのやり取りの姿もみられるが、クラスの音楽活動への参加は難しい。

B 児の音楽活動における変容

1 回目 (5 月 17 日) 楽器表現を通して、小集団の活動に参加する

B 児は保育者に引っ張られてホールに入室したが、歌に関心を示さず廊下に出る。「こぶたぬきつねこ」に合わせて「マルチトーンターン」を演奏すると B 児が入室し楽器を触りに来るものの、すぐに止めて寝転がる。歌「お花がわらった」に合わせた手の表現には参加しないが、B 児を後ろから支えて擬音の部分でジャンプする活動は何度もリクエストする。

いつもの保育室と異なるため小集団の活動に参加することを拒否していたが、目新しい楽器から楽しい音が出ることに興味を示し、楽器に手を伸ばす。クラス活動同様、歌に合わせて手でお花の形をあらわす表現遊びは好まないが、同じ歌でジャンプすることは気に入る。そこで、身体表現遊びを多く取り入れた。

7 回目 (7 月 5 日) 即興の音楽に合わせて身体をコントロールする

B 児のスカーフを持って走る様子に合わせて筆者がピアノ伴奏をつけたところ、D 児と F 児も同じように走り出した。ゴー・ストップゲームをクラスで経験している二名は、音楽が聴こえなくなると動きを止めて「もっと弾いて」という声を発した。B 児も他児と同じように音楽がなくなると走る動作を止めて、筆者に近づきリクエストの表情をする。

スカーフを持って走る B 児の活動に早いテンポのピアノ伴奏をつけると、楽しい活動に見えた D 児と F 児が模倣した。D 児らに真似られた B 児は後ろを走る D 児を気にする。音楽がなくなると動かない D 児に気づき自らも止まる。B 児は二人の動きや音楽に注目して動いたり止まったりするなど、行動をコントロールする。少人数での音楽活動は、B 児にとって見通しがもちやすい環境であったといえる（別府⑤）。

事例Ⅲ C 児 (4 歳女児)

1 歳時に自閉症と診断された C 児は公立幼稚園の年中組に在籍する。保育者と視線を合わさず会話も難しく、多動傾向である。家庭ではテレビから流れる音楽を好んで聞く。園ではリズム活動や歌唱に加配保育者と一緒に参加することも時々ある。

2007 年 9 月から翌年の 4 月まで計 21 回、自由あそびの時間帯に園内のピアノのある部屋で約 10 分前後、

筆者は非常勤の保育者としてかかわった。最初は筆者の童謡の弾き歌いやマラカスで遊ぶ姿を加配保育者と一緒に遠くから見ている。木製の筒状で、傾けると中の種が滑りサラサラと落ちる音がする楽器「レインスティック」に興味をもち筆者と一緒に鳴らす。7回目に「まつぼっくり」を歌うと身体を前後に揺らすため、歌のテンポを身体の動きに合わせる。徐々に保育者の手を離して、楽器演奏、スキップなどの活動に自主的に参加するようになり笑顔が出る。好きな歌をリクエストする時には筆者の手の甲を叩いて伝えていたが、「弾いて」という言葉に変化した。保護者参観日にはスキップを思いっきり跳んで、母親に笑顔の視線を向ける。

C 児の音楽活動における変容

9 回目 (11 月 21 日) 曲の終止を他者と合わせる

C 児は童謡「おかあさん」の弾き歌いが聴けると、身体を前後に揺らしながら両手でピアノを打ち鳴らし、筆者と終止を合わせる。C 児のピアノ音に少しずつゆっくり弱い伴奏をつけると、筆者の手や目を見て終止を合わせる。

連弾では C 児が弾く単音にパターン化したリズム伴奏をつけることで、C 児の気持ちが安定した演奏になり、音楽を媒介に筆者の手や顔を見て合わせられることが確認された。この活動を繰り返し要求してきたことは C 児にとって伴奏付のピアノによる自由表現は楽しい体験であり、他者と快の情動を共有できた場面といえる (別府②)。

15 回目 (2 月 20 日) 好きな歌で気持ちを切り替える

色へのこだわりが強い C 児は登園前に制服ではなく黄色の服を着たいと駄々をこね、機嫌が直らないまま登園し、教室前で鞆や靴を投げる。保育者が C 児の身体を持ち上げ回転させ、筆者が「お正月」の弾き歌いを行うと、ハッと表情を変えてピアノの所に来る。機嫌が直り、保育者から渡された鞆をフックに掛け朝の準備に入る。クラスで歌う曲を個別で事前に歌っておくと、次のクラス活動に着席し参加できた。

C 児は朝から気持ちの切り替えが困難であったが、個別で長い間リクエストしていた大好きな歌「お正月」を聴くことでこだわりからの解放につながり、C 児の不快感を快へ変容することができた (別府③)。「お正月」や「おかあさん」は、ゆったりとした 4 拍子であるため、ロックンロールをする C 児のタイミングに同期しやすく、歌詞が日常会話のようなため子どもにとってイメージしやすく好まれたと考えられる。その後の C

児は、個別で行った内容をクラス活動に少し般化することができた。

5. 結論

A 児、B 児、C 児が好む自己表現は楽器演奏、身体表現、歌を聴くことと様々であった。これらの表現に至る背景には、別府が示す①～⑤の快の情動を共有する応答的な対応や共感的な働きかけ、そして見通しが持てる環境の設定などを、保育者が意識しながら対応することが有効であることが確認できた。情動を共有するためには、対象児の出す音や行動を模倣することで共感的な気持ちを伝えたり、音のやり取りや操作しやすい楽しい音色の出る楽器で遊んだり、対象児の気持ちに寄り添いながら 5 つの観点を念頭に置いて保育者がかかわることにより、対象児は音楽活動を心地よい表現の場として感じられるように変化してきた。この対象児の心理的な変化が音楽行動に変容をもたらせ、自主的な参加につながったと考えられる。とくに自閉症児は見通しが立たないことに不安を覚えるため、事前に個別の活動を行っておくことは表現への自信となり、集団活動への参加も積極的になることが明らかになった。

3 名の共通点としては、子どもの興味をひく楽器や教材の存在があったと考える。音楽の活動への参加には、視覚的に興味をひく、珍しい音が響く、触覚刺激が得られるなど視覚、聴覚、触覚に刺激を与え、面白いと感じられる楽器の使用が有効であった。また、同じリズムや音型が繰り返されるオスティナートの曲が受け入れやすいことから、選曲についても工夫が必要であった。

6. まとめ

実践事例を通して音楽活動を支援の機会として捉えられることを実感した。個別活動においては対象児に寄り添った共感的な対応ができ、そこで表現できたことを集団活動に反映させるという連携を視野に入れた支援が可能である。そこで保育者は、音楽活動において音楽表現をさせるという意識ではなく、快の情動を共有する楽しい場として工夫することが大切であるだろう。最終的に A 児と C 児は少しずつ集団活動に参加できるようになり、個別で行った支援に意味があったと考えられるが、B 児は身体表現以外の活動にほとんど参加できず、今後の課題である。

〈注〉

- 1) 村井靖児 音楽療法の基礎、音楽之友社 1995 p16
- 2) 別府哲. 自閉症児の Joint attention 行動の発達と障害. 岐阜大学教育学部研究報告人文科学 43 (1). 1994 pp.147-155.